

## プロローグ

ソゴル・キヨウにとつて、カミナギ・リョーコは同じマシヨンのお隣さんの幼なじみ。それが二人の本質であるはずだった。繰り返す舞浜の夏が終わる頃には、リョーコにとつてはそうではなくなるのだと、キヨウが知っていたとしても。

七月二日、キヨウはカノウ・トオルに、リョーコと別れてきたと告げた。元々付き合っていたという訳でもない。でも彼女の気持ちを考えればこそ、この曖昧な関係は終わらせるべきだとキヨウは考えた。舞浜南高校の三年生で、映画研ではリョーコの先輩のトオルは眼鏡の奥の目を丸くして口まで開けて驚くと、キヨウに怒鳴りつけた。

「本気で言ってるのか、君は！」

「本気だよ。オレが中途半端にあいつと向き合うことが一番悪いんじゃないか、誰にとつても。だからさ」

キヨウは右手を上げるようトオルを促して、すれ違いざまに思いきり彼の手に自分の手を叩きつけた。トオルが彼女の何をどう思っているのかはよく分かっていた。

「あいつを、頼む」

それだけトオルに告げて、キヨウは走り去った。キヨウの右手は赤く熱く腫れていた。おそらくそれは叩かれた方のトオルも同じだろう。でもそんな痛みはすぐに消えるとキヨウは思っていた。

闇雲に夜の街を走り抜けて肩で荒い息をつく。これで良かったのだとキヨウは自分に何度も言い聞かせていた。

リョーコのためにも、彼女を大切にしてくれるであろうトオルのためにも、そして自分が共にあるミサキ・シズノのためにも。

足を止めた街角で、キヨウは濃厚な甘い香りに首を巡らせた。暗がりの中に乳白色の肉厚の花弁がぼうつと浮かんで見える。キヨウは誘われるように歩み寄り、クチナシの香りを嗅いだ。シズノはきつとこの花を知らない。

シズノの艶やかな黒髪を思わせる闇の中で、キヨウは白い花に触れた。民家の植え込みの花を手折るのはためらわれて、そのまま胸元に戻した右手を見た。腫れた熱さはもう引いていた。

決別の後に自分がすべきことは、自分を変えてしまうこと。

そのために手っ取り早い方法は、自分に何かを付け加えることだ。それは心に開いてしまった穴を埋めることでもあるのだけれど。

キヨウは南舞浜駅前へと足を向けた。

飛行母艦オケアノスに姿を現したキヨウを迎えたシズノは、彼の異変に気付いた。身に纏う空気が今までとは違っている。何だか不思議な——甘い香りだ。

「舞浜で何かあったのね」

シズノはキヨウを案じる眼差しを向けたが、それ以上は訊こうとしなかった。

キヨウがシズノの問いに答えないままでも、彼女は黙って目蓋を伏せるといつものように微笑んでくれた。

——何かがあった。ただそれだけ。

シズノは知らなくても良いことなのだと分かってくれたのだ。訊かれないことにはキヨウは答えなくても良い。それよりも彼女の想いに応えて唇を重ねた。

別に大したことがあった訳でもないのだ。キヨウはそう思おうとしていた。シズノに対するこの気持ちに、理由を求めても意味などはない。

彼女の背中に腕を回して抱きしめる、触れ合う体が温かかった。

舞浜時間の七月三日は日曜日。

待機任務でもあり、月曜の朝になるまでキヨウはオケアノスに留まった。

日曜は学校は休みだから、キヨウが舞浜の自宅に戻れば自室の向かい側、バルコニーの向こうの部屋で寝起きしているリョーコのことを気にせずには居られない。

でもその日のキヨウはリョーコのことを忘れていたかった。

月曜の朝になればいつも通り、幼なじみでクラスメイトの彼女と顔を合わせることになる。そして放課後になればリョーコは映研の部屋に顔を出して、そこでトオルと会うはずだ。二人の関係は、二人の望む方向に変わっていくはずだ。

七月四日の午後の授業中に、不意に雨が降り出すまで、キヨウはそう信じていた。